

地域×大学= 域学

いしがく

3



[ミッション]

おいしいお米で地域活性&食育

[チーム名]

COME☆RISH

活動の目的

中土佐町大野見地区の農家グループ「おおのみエコロジーファーマーズ」(以下おおのみEF)は、四万十川流域で、環境浄化微生物を用いるなど、環境保全に配慮した米作りを行っている。COME☆RISHは彼らが生産するおおのみエコ米を通じて、中土佐町地域の地域活性化を目指している。

米食がもたらす栄養バランスのとれた食事を広めることは、管理栄養士養成課程で学ぶ学生としても重要な目的であり、米飯に合うおかずのレシピ集作成に取り組んだ。レシピ集を用い、県内で行われる地域行事を通じて米食の良さを、PRしている。また、中土佐町の人々との交流から町民・学生共々がお互いに学び合い、発展していく(域学共生)ことも目指している。

[構成]

学生18名(健康栄養学部)

教員3名

「おおのみエコ米と共に!域学共生」

平成25年1月頃、おおのみEFの方が訪れ、「私たちが作ったお米を食べてみてほしい」と言われたことがきっかけで、おおのみEFとのお付き合いが始まった。田植えまではいわば「お客さん」状態であったが、立志社中の募集を知り、「自分たちでできること」を見つけるため、仲間たちで応募し、助成を受けることができた。



活動1年目は、メンバーのほとんどが1年生ということもあり、「何をすればよいのか」を模索した1年であった。しかし、大野見に通い、エコ米のことを学び、試食のお手伝いをする中で、農家のみなさんのお米に対する思いを知ることができた。課題として、「おおのみエコ米の良さを知ってもらい、地域活性に繋げるにはどうすればよいか」があげられた。そこで、「学生らしいPR活動」として、地域行事や学祭でのPRや、様々なツールの利用(Twitter, Facebookなど)を行い、また、管理栄養士を目指す観点から、レシピ集の作成にも取り組んだ。試行錯誤を重ね、多くの人からアドバイスをいただいて完成させた。完成したレシピ集は高知市内、中土佐町等で配布、アンケートの結果から、高齢の方まで高い評価をいただくことができた。

2年目は新入生が加入し、さらに動ける組織として、おおのみEFの方と密に連絡を取りながら、行事を進めることが課題となった。また、レシピ集にはさらに工夫を重ね、第2弾として発行、より多くの高知県民に大野見のことを知ってもらおうべく、活動中である。今年度は、学生の活動を中土佐町民にも知ってもらうため、現地で報告会を行った。活動の報告、エコ米の試食、レシピの油みそ等の試食も併せて行い、副町長をはじめ多くの町民に活動を広める第1歩となった。さらに、12月に地域食材を使い、レシピ集の献立を取り入れた食事を提供する定食屋を大野見青年の家で行ったことで、地域グループ、農家との交流がさらに活発となった。



一流の農家を目指して、 本気になりました！

【おのおみエコロジーファーマーズ会長】高橋 正二郎

「大野見のきれいな水でおいしいお米を育てたい。そのお米でたくさんの人に喜んでもらいたい」という思いで、3年前にエコロジーファーマーズができました。でも、メンバーは忙しくて、イベントをしてもなかなか全員が揃わない。また、米作りには家々に「秘伝」のようなものがあって、共通の栽培マニュアルを作るのは困難を極めました。

学生さんが来てくれるようになって、農家は変わりました。「本気になった」。平成25年度は売り上げが前年比4倍。26年産はさらに倍です。

農家は恥ずかしがり屋が多くて、イベントなどでお米を買いに来てくれた人とうまく話ができない。でも、どンドン話をする学生さんを見習って、説明が上手になりました。学生さんが頑張っている姿を見て、農家の本気になっている。一流の管理栄養士を目指す若者たちが来ているのですから、私たちも一流の農家にならないと！

平成27年度に、大阪の企業の方とその家族、計40人が体験農業に来る予定です。学生さんとの活動を通して、私たちは農業の説明ができるようになっています。一歩前にできる勇気と自信を持って受け入れます。



地域
の声

学生
の声

コメ作りで地域を活性化したい！

【健康栄養学部2回生】式地 麻湖

地域にこんなに受け入れていただけるとは思っていませんでした。私たちは思いを共有しながら一つの目標に向かっていきます。「おのおみエコ米をとおして、中土佐町の活性化を実現したい！」それが夢です。

平成25年6月に田植え体験に呼んでいただいて、地元みなさんの温かさや大野見の自然が大好きになって、「私たちが力になれないか」と思いました。島田先生の研究室で、「こんなのあるよ」と見せられた立志社中募集のチラシ。

「これだ！」と迷わず応募し、採択されて活動が始まりました。

初めのうちは戸惑うこともありましたが、だんだん主体的に考えて活動できるようになりました。大学祭で展示して、その後、エコ米に合うおかずを考えて「レシピ集」を作りました。昨年12月には「定食屋」のイベントを実施して、地元みなさんに私たちの作った料理を食べてもらい、とても喜んでいただきました。

このお米はおいしさが違います！土地の気候や環境がお米の味に現れます。生産者の地元に対する愛、努力がお米の味になるんです。将来私たちが管理栄養士や栄養教諭になったとき、この体験を子どもたちに伝えたいと思います。



平成25・26年度の主な活動

コメ作りから流通、PR、調理まで、 住民と“共育”！

- ◎大野見地区圃場での水質調査(四万十川)
- ◎レシピ集作成
- ◎大学祭(紅葉祭)でのおのおみEFの活動を紹介
- ◎新米の官能検査
- ◎EFメンバーとの交流(稲刈りにかえて) 神母野訪問
- ◎新米フェスタでのPR活動
- ◎ふるさとまつりでのPR活動
- ◎大野見イルミネーションにおける中学生との交流
- ◎中土佐町門前町でのレシピ集配布、試食、アンケート配布
- ◎高知市内でのレシピ集・新米の配布(てんこす、帯屋町)
- ◎中土佐町、大野見地区でのレシピ集配布とPR(黒潮本陣、源流の家)
- ◎第2弾レシピ集作成
- ◎大学祭(紅葉祭)でのおのおみEFの活動を紹介 レシピ集より試食実施
- ◎中土佐町にて活動報告会(副町長出席)
- ◎新米の官能検査
- ◎新米フェスタでのPR活動 酢鶏の試食
- ◎近江茶座との交流
- ◎立志社中他チーム(活輝)との交流
- ◎定食屋開催(50食、大野見青年の家)
- ◎[予定]中土佐町門前市、高知市内でのレシピ集配布、PR活動



地域の食材を生かせる管理栄養士に！

【専任教員】健康栄養学部講師 島田 郁子

去年の6月、大野見地区で大騒ぎしながら田植えをした彼女らが、今年は昼食をお客さまに出すまでに成長したことに、いまさらながら感動しています。

管理栄養士の仕事は、病院での栄養管理や指導といった臨床栄養業務、給食サービス等の給食業務など多様です。しかし、管理栄養士でありながら、地域の食材の専門家である人は少ないと言えます。少子高齢化の特に進んだ高知県で、学生たちのように大野見地区のみなさんとの交流活動をとおして、食材のルーツを学び、流通、入手、調理を経て人の体に入るところまでをきちんと学ぶことは、彼女らの将来に必ず役立つと確信しています。



先生
から

地域×大学= 域学

いしがく
④



[ミッション]

「民俗・言語調査」を通じて 地域と連携し活性化を目指す!

[チーム名]

from ZERO (フロムゼロ)

活動の目的

中山間地域のフィールドワークを行い、専門性を生かした地域貢献活動を行うことを目的としている。大学とその他の教育機関・高知県立歴史民俗資料館などの博物館・行政・NPO団体・地域住民との連携によって活動を行っている。

幡多郡三原村の全集落13地点および周辺地域の四万十市・宿毛市・土佐清水市の9地点における民俗・言語調査を実施した。現在、「モノ・コト・ヒト」の移動がわかる『民俗・言語地図』の作製を目指して、現地での聞き取り調査を続けている。その他、安芸郡東洋町、香美市物部町においても実施している。

次世代への継承も目的としており、この活動を地域の活性化につなげたい。

[構成]

学生8名(文化学部)

教員1名

カンカンミンガク(館・官・民・学)で 地域の課題を解決!!

三原村では、1980年に文化財保護委員会が「なくなってしまううちに集めておこう!」と数年間にわたって古民具を収集し、明治から昭和までに使用されていた機織りや糸車、石臼、食器などの民具約300点を中央公民館に保存してきた。2009年になり、三原村教育



委員会から「民具の収集はしているが、整理をするのに手伝ってもらえないか」という依頼があった。そこで、文化学部の橋尾直和教授が、「日本語言語文化論演習」受講の学生たちと高知県立歴史民俗資料館と協働で、「この課題に取り組もう!」と始めたのがきっかけである。民具調査は、2009年と2011年の5回にわたって実施した。

まず、番号札との照合、民具のクリーニング、分野ごとの整理から始めた。スケッチ・実測・写真撮影に始まり、民具を使ってこられた話者への聞き取り調査を実施した。こうして、カード作製が完了し、三原村教育委員会に寄贈するに至った。この時、民具の数は450点を超えていた。

2013年、「立志社中」における学生主体の活動として、「モノ・コト・ヒト」の移動がわかる『民俗・言語地図』の作製を目指して、現地での聞き取り調査を続けることになった。三原村の全集落13地点と周辺地域9地点にて「民具の方言呼称」の聞き取り調査を実施した。まさに「from ZERO (フロムゼロ)」、ゼロからの出発であった。2014年、高知県立歴史民俗資料館で開催された企画展「椿姫の里・三原」の展示と「第39回日本民具学会高知大会」の発表によって情報発信した。さらに、三原中学校の生徒たちとの共同による民具調査も実施した。これからも、高知県の発展に少しでも貢献できるよう頑張りたい。



学生が磨いた民具を見て 「目が覚めた！」

【三原村文化財保護委員会会長】宮田 守

5年前から三原村の文化財保護委員会の会長を務めています。それ以前にも、文化財保護に向けての取り組みがこの村ではあったそうです。でも、その時は、順調には進まなかった。

文化学部と三原村が、文化財調査と保護の協定を結んで、橋尾直和教授が乗り込んでこられた(笑)。そこから変わりました。倉庫に集めてあった民具を、学生さんたちがきれいに磨いて整理し、並べてくれた。それを見て文化財保護委員たちは「目が覚めた!」。かつて、「民具は村づくりの役に立たない!」と思っている人は少なくなかったのです。でも、今は違います。お年寄りたちが「私もやる!」。民具の大切さに村民が気づいたのです。

学生さんたちと一緒に、民具の使い方や方言呼称について調査しています。外からの目で、学生さんに意見を言ってもらうこともありがたいです。

今夏、中学生も一緒に民具調査をしました。学生さんたちが中学生の支えになってくれた。民具は一度なくなったら、再生は不可能です。ですから、次世代につなげていくことが大切です。

三原村では、民具資料館をつくる計画があります。ぜひ、協力してもらいたいですね。



地域 の声

学生 の声

民具調査は大切な まちづくり活動です!

【文化学部4回生】速川 礼羅

卒業研究で、高知県幡豆郡、特に三原村とその周辺地域の民具に関する方言呼称の地域差や変化について研究しました。from ZEROでの活動が、この研究のきっかけです。文化学部を志望したのは、地域の民話や伝説を学びたかったから。幼い頃から、祖父母に昔話を聞くのが大好きでした。方言にも興味があり、橋尾直和教授の門を叩きました。研究室に入ってみたら先輩たちが民具の研究をされていて…。民具の研究では、方言と民俗と、同時に研究できます。

私は人と話すのが苦手でした。あいさつもろくにできなくて。でも、調査では「やるしかない!」。三原村のみなさんは“サービス精神”があって(笑)、たくさん話をしてくださいました。今は、大きな声で、わかりやすく話せます!

平成26年度に、三原村の中学生と一緒に調査をしました。地域の次代を担う若者たちに、地域の歴史や文化を伝えることは重要です。お年寄りはみんな、子どもたちに知っていることを話したいんです。表情が明るくなります。調査を通じて、地域のみなさんが元気になります。民具調査は、大切なまちづくり活動だと思っています。



平成25・26年度の主な活動

地元のみなさんと中学生との 調査活動を通じて地域を活性化!

- ◎「モノ・コト・ヒト」の移動がわかる『民俗・言語地図』作製
 - ・幡豆郡三原村の全集落13地点にて「民具の方言呼称」の聞き取り調査
 - ・『三原のくらしとことば』刊行
 - ・『高知県立大学文化論叢』第2号への取り組み内容掲載
 - ・「三原村民俗・言語調査プロジェクトの報告—民俗・言語地図の試み—」
 - ・四万十市・宿毛市・土佐清水市の三原村周辺地域9地点にて「民具の方言呼称」の聞き取り調査
 - ・「第39回日本民具学会高知大会」(奥物部ふれあいプラザ)での発表と運営ボランティア
 - ・「三原村と周辺地域の『民俗・言語地図』報告書」刊行
- ◎高知県立歴史民俗資料館企画展「椿姫の里・三原」でのパネル展示
- ◎「三原中学校」の生徒たちと「民具の方言呼称」共同聞き取り調査
- ※平成25年度「学長賞」受賞



専門性を生かした地域貢献!

【専任教員】文化学部教授 橋尾 直和

「立志社中」from ZERO(フロムゼロ)のメンバーへ。マニュアルもない状況から、予備調査・本調査・補足調査と、自分たちで議論して完成させた調査票を用いて、85歳前後の地元の話者のみなさんと向き合い、熱心に聞き取り調査を行った成果がやっと結実しようとしています。まさに、専門性を生かした地域貢献プロジェクトです。地図解釈をめぐるのは、演習で遅くまで徹底的に議論しましたね。学長賞に輝いたことを励みに、これからも頑張りましょう!!

カンカンミンガク(館・官・民・学)の連携で、次世代につなげる地域貢献活動としても活躍できるよう、エールを送りたいと思います。

先生 から



卒業生

地域での活動に積極的に参画して!

宇賀 文里(うかあやり)

平成26年3月社会福祉学部卒業

現在は、社会福祉法人梶原町社会福祉協議会主事

梶原町女性消防隊員



田中きよむ先生のゼミはフィールドワークが魅力でした。実際に自分が参加することで、地域の方々の力になれていることが嬉しかったですし、直接関わることで、教えてもらったこと、楽しかったことなどいただいたものも多かったです。

キーパーソンや、その人の力になりたいと思うようになった方の話は本当に貴重で、魅力的で、地域には熱い思いをもった方がたくさんいて、それをつないでいくとステキな場ができると感じました。

大学を卒業して、平成26年4月から梶原町社会福祉協議会で働いています。地域の魅力を発見するための座談会を開催したり、ボランティアセンターの設立準備もしています。地域の女性消防隊にも加えていただいて、活動に参加しています。将来は、「宇賀が地域に来てくれて良かった!」と言われる人になりたいですね。

学生が地域に入ってくると刺激になります。住民の意識が変わるんです!「学生はすごい!」だから、地域での活動に積極的に参画してください!

学生時代の感動がエネルギー

山家 春香(やまいえはるか)

平成24年3月文化学部卒業

公益財団法人香川県体育協会クラブアドバイザー

一般社団法人Coクリエイション理事



清原泰治先生のゼミをきっかけに、まちづくりに参画するようになりました。3回生の時、高知こどもの図書館が10周年を迎えたので、記念行事として「巨大絵本」を製作しました。地元の作家が書いてくれた絵本を、縦横1.7メートルの手作りの巨大絵本にしました。私は、企業に協賛をお願いして、資金集めに奔走しました。若者の夢を実現するために、たくさんの企業が助けてくださった。とてもうれしかったし、若い力の可能性を学びました。

今は、高松市で、市民活動に参加しています。去年は、高松市美術館から協力をいただいて、夜に美術館のエントランスを開放し、「ナイトヨガミュージアム」というヨガイベントを実施しました。みなさんにとっても喜んでいただいて、巨大絵本を作ったときの感動がよみがえりました。

みなさんの笑顔を力に、学生の時に感じた感動を大切にしながら、地域の中でできることに取り組んでいます。

地域に学び、地域で育つ 学生たちのための教育プログラム

[立志社中]

高知県は多くの有為な人材を生み、若者たちは世界へと飛び立っていきました。日本で、そして世界で通用する人材を本学で育てたいという想いを込めて、坂本龍馬の「亀山社中」(後の海援隊)と、板垣退助らの「立志社」を合わせて、本事業を「立志社中」としました。「社中」には、「仲間」「結社」という意味があります。つまり、「立志社中」とは、「将来の目的を定めて、これを成し遂げようとする学生グループ」という意味です。

立志社中には3つの目標があります。

- ① 地域の課題に高い関心を持った学生が、地域の方々と共同して取り組む。
- ② 学生が地域の方々と一緒に活動することを通じて、学内だけでは学べないことを学ぶ。
- ③ 大学と地域が共同して、よりよい地域づくり・人づくりにつながるしくみをつくる。

立志社中は平成25年7月に、6チーム、参加学生数102名でスタートしました。平成26年度は8チームに増え、参加学生数266名で、高知県内を中心に活発に活動しています。

[地域学の必修化]

平成27年度入学生から、地域学関連の3科目を必修化し、すべての学生が地域で学び、地域で活動します。

1回生の前期には、「地域学概論」で、地域課題を学ぶ意義や、具体的な高知県の地域課題、地域活性化の取り組みの事例などを学習します。

「地域学概論」での学習成果を生かして、すべての1回生が集中形式で実施する「地域学実習(特)」に参加します。この実習では、地域の実態と課題を把握するための調査・記録活動や、実際に地域で展開されている地域づくりの活動等に参加して、課題解決に向けての考え方や取り組み方を現地で学びます。

さらに、専門教育科目で身につけた知識や技能を生かして、2回生以降に「地域学実習Ⅱ」を受講します。「地域学実習Ⅱ」では、学生が自らの関心に応じてテーマや実習場所を選択し、地域で実際に課題解決に取り組んでいる人々と協働して活動します。

その他にも、地域課題を取り扱う講義・演習・実習、課題へのチームでの取り組み方を学ぶ科目や地域課題解決にチームで取り組む「域学共生実習」を学生に提供します。

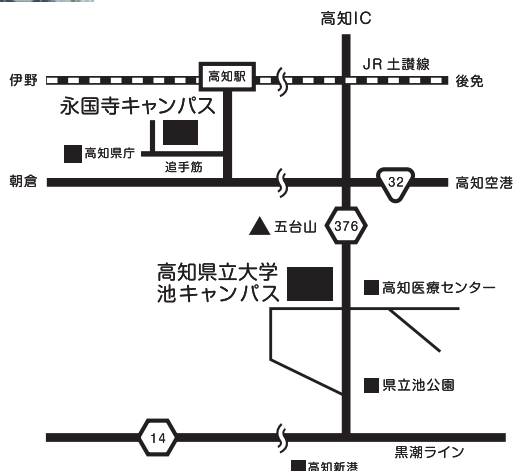
高知県立大学は「県民大学」

高知県立大学は、今年で創基70年になります。開学以来、地域に根差した大学を目指していましたが、それは主として有為な卒業生を社会に送り出すことをとおして地域に貢献するというものでした。

平成23年4月に法人化し、男女共学となり、高知県立大学に改称しました。本学は、「県民大学」をスローガンとして、地域と共に歩む大学へ大きく舵を切り、新たな船出をいたしました。

本学の学生たちは、地域に飛び出して、自分たちで企画・実行しながら、地域活動に参画しています。学生の感性と情熱、未来を拓く夢と知恵が、これからの社会づくりに大きな力となることを確信し、大学として全力を挙げて学生たちを支援します。

高知県立大学 学長 南 裕子



◎永国寺キャンパス
高知駅より車で約5分

◎池キャンパス
高知駅より車で約25分

 高知県立大学

〒781-8515 高知市池2751-1 ☎088-847-8700 (代表)

<http://www.u-kochi.ac.jp>